

消滅した我が医局

江別医師会
江別すずらん病院

大石 智也

私は九州大学を卒業後、別府市にある九州大学温泉治療学研究所附属病院気候内科に入局しました。気候内科では気候と関連した疾患や時間生理学の研究を目的としていました。

学生の時、夏季臨床研修の募集で「温泉に入り放題」という紹介があり、同級生ら7名で連れ立って気候内科を訪れました。しかし、実際に研修に行ってみると、外来や病棟での臨床実習の予定がびっしりと組んであり、遊びどころではありませんでした。官舎内の宿泊施設のお風呂は温泉で、確かに「温泉に入り放題」でしたが…。

この研修がきっかけで、私は同級生3人と共に気候内科に入局することになりました。当時の気候内科では、K教授はインフルエンザの研究など呼吸器、Y助教授は不整脈、狭心症、心筋梗塞など循環器、I講師は脳内アミン、日内変動など内分泌、という布陣でした。

研修医時代はいろんなことがありました。インフルエンザの血中抗体価の測定を4人で教授に申し出て喜ばれましたが、どう間違ったのか、結果を見た教授の顔色がサーッと変わりました。先輩方に再測定という手間をとらせてしまいました。同期Ic君は尿や喀痰の細菌の定量培養で、ピペットを勢いよく吸いすぎて検体を口に吸い込み、その後ピペットの吸い口に綿を詰めることになりました。同期It君は大便中虫卵の便こしで便まみれになり、病棟中から総スキャンをくらいました。特殊な血液寒天培地作成のためウサギの耳の血管から採血しますが、最初はうまくいかず、耳の末梢から中枢側に次々と血だまりを作り、とうとう片方の耳をダメにしてしまいました。採血の技術は向上しましたが、可哀想なことをしました。喀痰を蛍光染色して結核菌を見つけた時や、骨髄染色標本がきれいにできた時は感激しました。当時、土曜日は半ドンでしたが、その午後や日曜もグズグズと病棟にくすぶっていて、先輩達からは、「病棟ゴロ」と呼ばれていました。しかし、時には、K教授夫妻と連れ立って、国東半島、杵築、宇佐などを車で巡りました。It君は仏像の写真を撮っては現像し、病棟などに飾っていました。当直の夜は、当直室のもう一つのベッドや医局のソファに誰かが泊りました。冬ともなると、ぐっすり寝入った頃の明け方に、決まって喘息の患者さんが発作を発症して来院し、起こしてくれました。おかげで、処置後は眠れず、朝のミーティングに皆遅刻するこ

とはありませんでした…。

気候内科には臨床用と動物用の人工気象室がありました。照明、室温、湿度、気圧などが調節できる臨床用人工気象室を用いて、Y助教授は、当時日本で最初にエイビオニクス社製の24時間心電図を用いて、姿勢などによる人工産物などの基礎的研究から、不整脈、異型狭心症、心筋梗塞などの臨床研究を行い、日本医師会賞を受賞されました。私たちは被検者になったり、結果のまとめを手伝いました。

翌年、助手となり、外来診療（検査では、消化管の造影検査や内視鏡検査を担当）、病棟診療、研究が始まりました。研究では、内分泌部門に入りました。私の研究テーマは「脳内ノルエピネフリンによる副腎皮質ステロイドホルモン分泌の中枢性調節機序」で、I講師は「脳内セロトニンの日内変動の機序」でした。いずれも動物用人工気象室で、アイソトープでラベルしたアミンや前駆物質をラット脳室内に注入し、6時間ごとに減衰する脳各部位のアミンの放射活性を測定して、脳内アミンturnoverを計算するものでした。サンプル採取のために、朝から晩までの徹夜となります。これが月2回ほどありましたので、I講師は「日内変動の研究はたいがいにせんと、命が縮むばい」と言っていたものです。それもあってか、I講師はクリニックを開業することになり、気候内科を辞めていかれました。

その後、私は研究結果を内分泌学会の英文誌にまとめ、これにより、マサチューセッツ工科大学Brain Research, Neuroendocrine Regulationのラボに1年半 (Postdoctoral Fellow)、次いでハーバード大学Biochemical Pathologyのラボに1年 (Research Fellow)、留学できました。それらの間、New England Medical Center Hospital, NeurologyのResearch Fellowを兼任しました。帰国後、産業医科大学脳神経内科に移りました。

九州大学温泉治療学研究所は、昭和6年九州大学の附属研究所として発足し、その後、国立大学の機構改革に伴い、昭和57年に生体防御医学研究所に改組され、平成15年に九州大学の三病院（医学部附属病院、歯学部附属病院、生体防御医学研究所附属病院）が九州大学病院に統合されて、九州大学病院別府先進医療センターになりました。これに伴い、「気候内科」は「循環・呼吸・老年内科」に変更され、その名称は消えました。平成23年には、九州大学病院の分院となり、九州大学病院別府病院となりました。

このようにして、卒後の青春時代を過ごした我が「九州大学温泉治療学研究所気候内科」は消滅してしまいました。